

# 伸びる神立の子



H23年11月8日  
神立小学校  
子育て便り3

## 「先生！うちの子，本を読まないんです！」

中学生になって，受験も近づいてくると子どもの学力についてあらためて向き合わなければならなくなってきます。これは親にとっても子どもにとっても厳しいことです。

ところで，あらゆる学力のもととなるのが国語の力とよく言われますが，どうすれば国語の力が身につくのでしょうか。

「先生，うちの子は国語の成績が悪いんですが，どうしたら良くなりますか？」

「本をたくさん読むといいでしょう。読解力が身につきますよ。」

などという保護者と先生の会話を中学3年生の面談で聞くことがあります。

でも，受験を控えた子にそんな余裕はありません。幼い頃から子どもを本好きにさせて，読書の習慣を身につけさせておけば……と親として，つい思ってしまうものです。

国語は「やっても点数がとれないし，やらなくても点数がとれる教科」と言われることがありますが，本をたくさん読んでいる子は読解力に優れ，やはりテストの結果も良好です。もちろん，テストの点数を上げるために本を読むわけではありません。本を読むことを通じて教養を身につけたり，知識を広げたり，物語から人の心や人生を学んだりして人間的に豊かにさせてくれるのが読書の本来の姿といえるでしょう。その過程でいわゆる「読解力」をはじめとして想像力や推察力，洞察力，思考力などが高められていくわけです。



11月7日に行われた読書朝会の一場面です

いろいろ述べましたが，早い話が，幼いうちから読書の習慣をつけさせて，本を読む子に育てることがやっぱり親の役目として大切なのではと思います。おそらく多くの保護者の方も子どもを本好きにさせたいと思っておられることでしょう。

でも，「本を読みなさい！」と指示を出しても，なかなかうまくいくものではありません。興味深いデータがあります。読書量の多い子の85%以上は「自分の親は本が好きである」と思っているということです。実際に親が読書好きかどうかは別として，親が本を読んでいる姿が子どもに影響を与えているということはいえそうです。「子は親の背中を見て育つ」とはよく聞く言葉ですが，読書についても同じことがいえるようですね。

## 子どもを伸ばす小さなアイデア

その3

### 3 子どもの手の届くところに辞書を

「パソコン，テレビ，学習机，辞書の中で，子どもの学力と最も関係の深いものはどれでしょう……？」。これはある調査の結果なのですが，ちょっと考えると，いろいろな情報が手軽に得られるパソコンがいいのかなあ…となりそうですが，実は「辞書」なのだそうです。子どもの手の届くところに，辞書がある家庭は一般的に子どもの学力が高い傾向があるそうです。わからない言葉に出合ったときに，すっと手を伸ばして自分から調べてみる。そんな環境が子どもの言葉の世界を広げるのですね。

私たち人間は言葉を使ってものを考えます。たくさんの言葉を持っている人は物事の微妙な違いにも気づき，幅広く物事を考えることができます。逆に言葉が少ないとすぐに力っとなり暴力に出てしまう傾向もあるようです。（表現手段を言葉ではなく暴力に求めてしまうからなのでしょう。）多くの言葉を知っていることは心を豊かにすることといえます。辞書は食卓の上やテレビの横など，家庭内の手軽に使えるところにカバーから出して，ちゃんと置いておくといいようです。